View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Community Repository of Fukui

福井県立大学論集　第36号　2011. 2

［研究論文］

経済学と「理財学」

― 明治期における日本語変遷の一齣 ―

下　谷　政　弘

1　「経世済民」

今日の「経済」(economy) という言葉の由来についてはよく知られている。それは、かつて中国の古典で用いられた「経世済民」、あるいは「経世済俗」や「経国済民」などという熟語（連語）の短縮形であったという。すなわち、もともと中国では「世を経(おさ)めて民を済(すく)う」の意味内容に理解できる言葉であった。今日、その例証の一つとしてよく引用されてきたのは、東晋の葛洪（283～343年）による「以聡明大智、任経世済俗之器而修此事、乃可必得耳」(聡明大智を以て、経世済俗の器に任じて此事を修めば、乃ち得可きのみ)(抱朴子、地眞)、などなどである。馮天瑜の最近の研究（2005）によれば、中国では隋唐の時代以降に「経世済民」などの連語がしだいに流行語となりはじめ、また唐代以降になると短縮語としての「経済」そのものも、たとえば「廟堂之上、無非経済之才」(『玄宗本紀』) のように、しばしば使われるようになったという（馮天瑜、160頁)。

このように、「経済」という用語のオリジンは中国の古典漢籍のなかに求められる。それに対して、今日、日常一般に使われる日本語の「経済」にはそのような古典的な経緯はほとんど消えてしまった。そこからは、それがかつて「経世済民」の意味内容をもつ熟語であったことを嗅ぎ取るのはもはや困難である。つまり、現代日本語における「経済」がもつ意味内容は、「経世済民」からではなく、むしろ西洋語（英語の economy など）から来るようになっている。こうした事情に関して、陳力衛『和製漢語の形成と展開』(2001) は、日本で「一旦外来の英語の概念（economy）に照らして訳語として成立すると、固定した意味概念が込められてきて勝手に字面通りに分解して理解できなくなる」(277頁)、というふうに述べている。

以上のように、今日では現代日本語の「経済」がもつ意味内容は、かつての漢籍用語のそれから大きく隔たり、むしろ幕末・明治期に輸入された西洋語の概念をもとにしている。たとえば、現代日本語の「経済」には「節約」や「家政」などといった意味内容も含まれるが、それらは西洋語（英語の economy など。本来は古典ギリシャ語の *οἰκονομία*）から来たものである。

受付日　2010. 11. 1
受理日　2010. 12. 13
所　属　福井県立大学学長

つまり、かつては「中国語の古典に使われ、漢籍本来の意味を持っていながら、今度は訳語として新たに意味を吹き込んでいく語も多い。その新しい概念に使うことが主になっていって、漢籍の出典との関連がますます薄らいでいく」（陳力衛、276頁）ことになる。いわゆる「和製漢語」と称されるものの誕生である。まさしく、「経済」とはそのような日本語の一つなのであり、その典型的なケースでもあった。

ここで一考すべきなのは、つぎの問題である。すなわち、「経済」という言葉がかつてこのように「世を経めて民を済う」の意味内容であったとすれば、それは今日的な「経済」（economy）という概念とは異なり、それはむしろ広い意味での「統治の術」としての政治もしくは政治道徳に通ずる言葉であった。「天下を経済する」などという表現はまさしくそのことを示していた。「江戸時代に於ては〈経済〉なる言葉は今日謂ふ所の経済なる言葉よりも一層広義に解せられ、政治・経済・社会全般に亘れることを指した……即ち経済の原理原則を考へるといふよりは、その時々の政治の是非を論じたものである」（本庄栄治郎『日本経済思想史研究』、２～３頁）。または、それは「内容的にも政治論か道徳論か、あるいは時事問題への対策が多く、原理的な経済学とはほど遠いもの」（杉原四郎『日本の経済思想史』、144頁）であった。

たとえば、『大言海』を開いて「けいざい／経済」を調べてみると、その冒頭部分には「〔経（ハカリ）✓国 済（ヲスクフ）✓世（ヲ）〕（一）国家ヲ経営シ、世民ヲ救済スルコト。治国ノ術。政治ノ方」と書かれている。また、『日本国語大辞典』を繰って「経済」という言葉を調べても、そこには第一の意味として、「国を治め、民を救済すること。政治」と明記されている。『漢字百科大事典』の「経世済民」でも、やはり、「世をよく治め、人民の苦しみを救うこと。また、そのような優れた立派な政治」とある。

すなわち、ここでの問題とは、本来的に「統治の術」たる政治や政治道徳などを表現していた「経世済民＝〈経済〉」の字句は、一体どのような経過をたどって今日的な「経済」（economy）を表す用語として使われるようになったのか、ということなのである。

以下では、その具体的な経緯について見ていくことにしよう。あわせて、幕末・明治期に新たに導入された西欧近代のいわゆる political economy が「経済学」と訳されることとなった事情、とくに「理財学」という用語との関係について、さらにはそれらに関連する時代背景などについても考えていくこととしよう。

2　「経世済民」から「一種の学文」へ

いうまでもないことだが、「経済」という言葉そのものはすでに江戸期にはさかんに用いられていた。たとえば、江戸中期の儒学者、太宰春台（1680～1747年）の書物のタイトルは『経済録』（1729）と名づけられていた。もちろん、この『経済録』における「経済」とはより広い意味で使われており、前述したようにいわゆる「経世済民」の短縮形であった。その書き出

しにも、「凡〔およそ〕天下国家ヲ治ルヲ経済ト云、世ヲ経シテ民ヲ済フト云義ナリ」と表明されていた。あるいは、「経済〔ケイザイ〕トハ天下国家ヲ治ルヲイフ、学者ハ童子ノ時ヨリ経済ノ志ナクハアルベカラズ」(「倭読要領」) とも述べられていた。

同様にして、江戸後期に活躍した佐藤信淵 (1769～1850年) の『経済要略』(1827) がある。そこにおいても書名に「経済」が含まれていたが、本文中には「経済トハ国土ヲ経緯シ蒼生ヲ済救スルノ義ナリ」と述べられ、また「経済トハ国土ヲ経営シ物産ヲ開発シ部内ヲ富豊ニシ万民ヲ済救スルノ謂ナリ」と表明されていた。それは、「信淵独特の経世済民の経済論であり学であった」(進藤咲子『明治時代語の研究』、70頁) という。

これらの他にも、江戸期のいわゆる「経世家」たちの著作として、たとえば青木昆陽『経済纂要』、海保青陵『経済談』、中井竹山『経済要語』、古賀精里『経済文録』、正司考祺『経済問答秘録』、本多利明『経済放言』、などなど、「経済」の語を書名に冠するものは少なくなかった。それらはいずれも基本的に「経世済民」の思想を著すものであり、江戸期には伝統的な「統治の術」や政治道徳として「経世済民＝〈経済〉」の思想が広く根付いていたことを示している。

これに対して、大きな変化がもたらされるようになるのは、周知のように幕末から明治期にかけてのことであった。「江戸中期まで、日本の経世学者が用いた〈経済学〉という言葉は、大体中国明清時代の〈経済学〉の意味と類似し、江戸末期になって初めて変化が生まれた。これは西洋術語の伝来と関係がある」(馮天瑜、166頁)。つまり、伝統的な「経世済民＝〈経済〉」に置き換えるようにして、新たに西欧の経済学が輸入されはじめたのである。それらの新学問は、「オランダ、アメリカ、イギリス、フランスを経由し、留学・邦訳・お雇い外国人という異なったコミュニケーションの手段を通じて導入された」(井上琢智『黎明期日本の経済思想』、132頁)。こうした西欧の経済学や経済思想の導入に関する当時の詳しい事情については、以下にも見ていくように、すでに優れた数多くの研究成果が蓄積されている。

西欧近代の経済学について、たとえば福沢諭吉『西洋事情外編』(慶応3 (1867) 年) ではつぎのように述べられていた。「〈ポリチカル・エコノミー〉経済と訳すの字は、其字義を以て事実の義を尽すに足らず。〈エコノミー〉とは希臘〔ギリーキ〕の語にて家法と云ふ義なり。家法とは家を保つの規則にて、家内百般の事を整理することなり。家事を整理するの術は無益の費を省くを以て大眼目とするが故に、〈エコノミー〉の文字は唯質素倹約の義にのみ用ゆることあり。上の〈ポリチカル〉の字は国と云へる義なれば、此二字を合せて〈ポリチカル・エコノミー〉と云ふときは、唯国民、家を保つの法と云へる義をなすのみ」。

このように述べてから、諭吉はさらに続けている。「経済は畢竟一種の学文にて、之を法術と云ふ可らず。マッコルロック氏云く、経済とは、物を産し、物を製し、物を積み、物を散じ、物を費すに、其紀律を設る所以の学文にて、即ち其物とは、或は必用なる物あり、或は便利なる物あり、或は人意を悦ばしむる物ありて、何れもこれを売買して価あるものなりと。又或人

の説に、此学は資財の事情を説き之に由て生ずる所の物と又之を分配する法方とを論ずるものなりと云へり」（以上、『福沢諭吉全集』第一巻、457頁）。

このように、日本に西洋の経済学が導入された黎明期においては、「経済」という言葉はこれまでそうであったような「経世済民」の意味から急速に変化しつつあった。諭吉はいう。「抑も経済の大趣意は、人の作業を束縛するには非らずして、却て其天賦に従ひ、自由に其力を伸べしむるものなり」、と。また、すぐ続けて、「経済学の旨とする所は、人間衣食住の需用を給し、財を増し、富を致し、人をして歓楽を享けしむるに在り」（同前、456頁）、とも述べていた。

こうして、「経済（学）」の語は、「物の生産、物の集散、交換、流通、消費、資本、分配等々を体系的に解明する学問に名付けられた訳語に変貌」（進藤咲子、前掲書、70頁）しはじめたのである。それは、かつての経世済民的な政治学や道徳論から離れて、経済事象そのものを対象とするものへと変化しはじめた。すなわち、たんなる「法術」などではなく「畢竟一種の学文」となり、しかも「其紀律を設る所以の学文」へと変貌することとなったわけである。この「紀律」ということについては、諭吉は別に「経済（学）の定則」という表現を用いている。たとえば――

「世界万有を察するに……経済の学に於ても亦一定の法則あること他に異なることなし。その定則の一班を窺ふときは……合して一体と為しその全璧を見れば、至善至美、尽さゞる所なし。故に是学も猶ほ他の生物論、地質論、本草学の如く、共に是れ地球上の一学科たりと雖ども、その理を窮（きはむ）るに至ては亦以て造化霊妙の仁徳を窺ひ見るに足れり。右の如く経済学の定則は、元と人造に非らず、又人為を以て之を変易改正す可きものにも非ら」（『福沢諭吉全集』第一巻、459頁）ず。

このようにして、「日本人の経済思想は、福沢諭吉において転換を見せた。それは、統治の術としての伝統的な経済論〈経世済民論〉から、西洋的な市場経済を基礎にした経済学への転換である。……諭吉が西洋の経済思想を受け入れたのは、日本の経済論には無いものをその中に発見したからであろう」。日本の経済論になかったもの、それは一体何だったのだろうか。すなわち、「人事の世界に属する経済においても〈法則 law〉が存在し、その探求の仕方と利用の仕方において、自然界の〈法則〉に異なることはないという見方がそれであったと考える。福沢の言葉では、〈経済の定則〉あるいは〈経済学の定則〉である」（八木紀一郎「福沢諭吉」、13～14頁）。

3　「経世済民」論から「経済の定則」へ

以上のように、幕末明治期において「日本人の経済思想」は大きな転換点を経過することになった。とりわけ、経済学の内容を「経済の定則」を追求するものと新たに位置づけた点に大きな意義を見出すことができる。しかしながら、ここで注意しなければならないのは、その転

換プロセスは必ずしも一足飛びに、「伝統的な経済論〈経世済民論〉から西洋的な市場経済を基礎にした経済学へ」となされたわけではなかった、ということである。

ある論者は、「明治維新以降の思想状況を、西洋的近代思想の独壇場（ママ）と解することは事実に反するであろう」として、つぎのようにいう。「確かに西洋の思想・学問は思想界・学界の中心的地位を占め、これとは対照的に、江戸時代の思想・学問は権威を失い、儒教でさえも普遍性を否認されて〈漢学〉となってしまった。しかし……江戸時代の人間観・社会観・倫理観あるいは思惟様式・基軸的価値は、皮膚感覚的な本音として生き続けていたと想定する方が自然であろうし、おそらくこのことは知識人にも当てはまるのではないかと推測される」（川口浩「日本経済思想世界」、13頁）。

あるいは、「経済」の用語そのものについても、つぎのような指摘がある。たとえば、「18世紀にはいると日本は貨幣経済の時代にはいり、ヨーロッパの economy（オランダ語 huishoudelijkheid）と同質の用語として〈経済〉が用いられるようになった。俗語の〈勝手・世帯〉（暮らし向き）などとも同じ用法がみえ、19世紀前半には現代の〈経済〉とほぼ同質の意味としての〈経済〉が確立。従来この点はみすごされている。現代語の〈経済〉は江戸後期に淵源する」（杉本つとむ『語源海』、263頁）、と。

つまり、「経済」の用語は、西欧の経済 economy が入ってくる以前から、すでに「経世済民」一辺倒の状況を脱しはじめていた。それは徐々にではあるが、むしろ経済的な事象を中心とするものへと自己転換しつつあったという指摘である。ある論者はいう。「徳川時代末期に近づくにつれて、経済問題の重要性がますます増加し、やがて〈経済〉が〈政治〉より分離し、区別され、それぞれ独自に検討される傾向が生まれて来た」（島崎隆夫「日本経済思想の研究史」、116頁）。

また、別の論者は次のようにもいっている。「〔こうした〕粗筋は、太宰春台《経済録》と佐藤信淵《経済要略》を線で結ぶとほぼ掴めます。18世紀初頭に出た太宰の本は、全く経世済民論です……これに対して一世紀後の佐藤信淵では、本質的に昨日今日の〈経済〉になっている……無論、執筆のモチーフが良い社会の追求ですから、経世済民の枠が掛かっている……しかし太宰春台が理念の世界にいたとすれば、佐藤信淵は現実の世界に入っている。日本における〈経済〉の語義は、18世紀初頭から19世紀初頭にかけて、決定的に今日の意味の方向へ変わりつつあった」（馬場宏二「経済という言葉―意味・語源・歴史―」、5～6頁）、と。

事実はたしかにそうであったろうと思われる。「どちらも人間社会の現象ですから、政治と経済で相互に影響しあうことはいくらでもあるし、重なる部分もある」（馬場宏二、2頁）。なるほど、さきに掲げておいたように、江戸後期の佐藤信淵の「経済トハ国土ヲ経営シ物産ヲ開発シ部内ヲ富豊ニシ万民ヲ済救スルノ謂ナリ」（『経済要略』）という叙述内容をみるならば、それは明らかに一世紀前の太宰春台の「経世済民」論に比して経済的トピックスを前面に押し出

したものへと変化していた。この佐藤信淵『経済要略』について、馮天瑜はつぎのようにいう。「彼が述べているのは依然として経世済民の政治論であるが、その重点は物質財産の創造と分配においている。このような国の経済と人民の生活への検討に力を入れる経済論は……実学の精神が非常に興隆していることの表われであり、〈経済〉という言葉が近代的な意味へ転換する趨勢をも予示してい」（165頁）た、と。

もちろん、反面では、そこにはまだ多分に「経世済民の枠が掛かってい」たということも指摘できるのである。あるいは、より問題とすべきなのは、たんに経済事象に関する言及の多寡の変化だけではなく、「経済」が「畢竟一種の学文」へと、しかも体系的に「其紀律を設る所以の学文」へとどれほど変貌したのかどうか、なのであろう。

それでは、はたして誰が最初に、「畢竟一種の学文」として「経済」という用語のなかに、そのような新たな意味を吹き込んで使いはじめたのであろうか。

幕府は、江戸末期の文久２（1862）年に、発注しておいた軍艦建造の立会いと引き取り作業、および軍事技術や医術などの習得を目的として、西周助（のちの西周）や津田真一郎（真道）ら16名をオランダへ派遣している。そのなかで、「西と津田はライデン大学教授フィッセリング（S.Vissering）から、国家学の基礎として自然法・国際法・国家法・統計学とともに経済学を学んだ。これこそ〈経済学事始〉と呼ぶにふさわしい出来事であった」（井上琢智『黎明期日本の経済思想』、131頁）。

しかし、なるほど「経済学の体系的学習という意味では、オランダ留学はまさに〈経済学事始〉だった……が、西における西欧経済学との接触は……それ以前にすでにみられた」（杉山忠平『明治啓蒙期の経済思想』、35頁）という。つまり、西はオランダ留学の直前に松岡鱗次郎に宛て手紙を書き、その中でつぎのように述べていた。「小生頃来西洋之性理之学、又経済学抔之一端ヲ窺候処、実ニ可驚公平正大之論ニ而……」（『西周全集』第一巻、８頁）。ここに明らかなように、西は、「性理之学」（哲学）とともに彼を驚かせた「公平正大之論」たる西洋の経済学を、早くも「経済学」と名づけて呼んでいたことがわかる。

しかし、その西周の『百学連環』によれば、「今ホリチカルエコノミーといふときは即ち国家の制産に係はるところなり。近来津田氏世に之を訳して経済学と言へり」（『西周全集』第四巻、235頁）、とある。すなわち、西は「経済学」とはそもそも津田真一郎の訳語だと指摘していた。前述したように、西と津田は日本最初の留学生の一員としてオランダに留学したが、彼の地で、1863（文久３）年から師事したフィッセリング教授との間で取り決めた「書付」が残っている。その「書付」のなかで、津田がオランダ語の staatshuishoudkunde（国家財政学）を「経済学」と訳していたからである。

しかしながら、その「書付」の前年には『英和対訳袖珍辞書』が刊行されており、そのなかにすでに「経済学」という訳語が掲載されていた、という事実がある。ところがまた、その辞

書の刊行には津田自身も関与していた、などという事実も指摘されている。「それが津田の命名であるのか、他の洋学者のそれであるのか、はっきりしない」（進藤咲子、69頁）、というのが実際のところなのであろう。

また、明治の初年にもっとも広く読まれた経済書のひとつはウェイランド Francis Wayland の“The Elements of Political Economy”（1837）であった。諭吉はその一部分を「経済学要論」と名づけて翻訳し、自ら慶応義塾での講読教材として使っている。同書に関連しては、のちに、「その冒頭に“Political Economy is the Science of Wealth.”という定義が掲げてあるので、一時〈富学〉という語を用いた人もあったが、これではいささか金儲けの学問と聞える弊があるとて、広くは行われず、異論はありながらも、やはり〈経済学〉と言うておったのである」（穂積陳重『法窓夜話』、194頁）、という指摘もある。

4　大学における「理財学」

ところで不思議なのは、明治の前半期のある時期、大学などの高等教育機関においては、なぜか「経済学」という用語は学問の名称として敬遠されていたという事実である。その時期の高等教育機関においては、いわゆる「経済学」は「理財学」と表現されることが多かった。「理財学」の方が「経済学」より優勢を占めた時期があったという。

この「理財学」という用語は、井上哲次郎・有賀長雄の『哲学字彙』（1881）のなかにも見出すことができる。そこでは、Economics は「経済学」ではなく「家政、理財学」と訳されていた。今日現行の『広辞苑』（第６版）を開いてみても、経済学とは「経済現象を研究する学問。旧称、理財学」とされている。

あるいは、『日本国語大辞典』によって「理財学」について調べてみると、そこにも「けいざいがく〈経済学〉の旧称」と書かれている。そして、ここで注目すべきなのは、同辞典においてはさらに一歩踏み込むような形で、「明治前期には、英語の economics の訳語としては〈理財〉を用いることが多く、〈経済〉に落ちつくのは後期になってからのことである」（1231頁）、と指摘されていることである。

たとえば、「慶応義塾などでは理財科とか理財学会とかいわれていました。〈理財〉という言葉も明治の初めには使われていました」（杉原四郎『日本の経済思想史』、145頁）、というわけである。または、「慶応義塾では明治23年１月大学部を置き文学、法律、理財の三科を教授することとし、以て学科の程度を高めた」、あるいは「専修学校〔現在の専修大学〕では明治21年経済科を理財科と改めた」、などの叙述を見出すこともできる（教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第三巻、236～７頁）。さらにはまた、明治20年ころの明治法律学校（現在の明治大学）や関西法律学校（現在の関西大学）などの講義録の中にも「理財学」が見出されるという（杉原四郎、同前、49頁、53頁）。

明治10年代から20年代にかけては私立の法律専門学校の設立が相ついだ時期であった。それらの多くは法律だけでなく経済学関連の科目も一部教授し、また地方有志の便宜を図るために「講法会」を設立して「校外生」に講義録を実費頒布するようになった。すなわち、「我邦維新創草……法科大学僅カ一アルノミ、其他私立学校ノ之ヲ教ユルモノナキニアラスト雖モ……官私ノ学校ハ概子府下ニアルカ故ニ地方有志ノ士ヲシテ講法ノ便ヲ欠カシムル……於是乎新タニ講法会ナルモノヲ設ケ」（明治大学法学部「講法会設立ノ趣意」）ることとなったのである。このなかで、「法学を主とする私学の鼻祖」（明治大学『明治大学六十年史』、3頁）という明治法律学校（明治14年設立）について調べてみると、その講法会における経済学科目（明治20年～26年）の名称はすべてが「理財学」となっていた。

以上の事柄について、それでは東京大学（のち帝国大学）においてはどうであったろうか。当時、東京大学における経済学科目は、一体どのように呼ばれていたのだろうか。

明治10（1877）年に創設された東京大学においては、最初の経済学科目は文学部第一科（史学哲学及政治学科）で開始され、翌11年から御雇い外国人フェノロサ Ernest　Fenollosa によって講じられた。これが「本学〈経済学〉の嚆矢であり〈経済学部〉の源流」（『東京大学百年史』（1）、873頁）であったとされている。その後における経済学科目の所属をみると、文学部の第一科（哲学政治学及理財学科）、また第二科（政治学及理財学科）、さらには法政学部政治学科などの時期を経た後に、明治19年、東京大学が「帝国大学」へと改称された際に法科大学の政治学科の方へと移された。さらに、明治30年に帝国大学は「東京帝国大学」となるが、41年には政治学科から経済学科および商業学科の2学科が分離設置され、ついには大正8（1919）年にいたって法学部から独立して「経済学部」が誕生することとなる。

以上の推移のなかで興味深いのは、明治12年に文学部の学科組織が改編されると同時に、上記したように、文学部第一科が「史学哲学及政治学科」から「哲学政治学及理財学科」へと変更されたことである。つまり、新たに「理財学科」が加えられたのであり、科目名についても、「このさい従来の〈経済学〉が〈理財学〉と改められた」（『東京大学経済学部五十年史』、4頁）。この学科組織の改編にあたって、当時の加藤弘之綜理が文部大輔に宛てて提出した「伺書」（明治12年）が残っている。そこには、「此学ヲ専修セント欲スル生徒モ甚タ少カラサルニ由リ候儀ニ有之候依テ方今先ツ理財学ヲ加設シ……」と述べられていた。また、文中の「理財学」の字の下には「〈ポリチカル・エコノミー〉としるされてい」た、という（同前、4頁）。

それ以降、さらに「実学的〈理財学〉の重視」（『東京大学百年史』（1）、874頁）が積極的に進められたのであり、しだいに授業時間数が増大し学科目の分化も行われた。当初の理財学の担当者はフェノロサひとりであり、彼が用いた教科書は「ミル氏著理財論綱」であった。翌明治12年からは大蔵省から一名が講師として加わった。また、日本財政論が新科目として分化して以降は大蔵省からさらに二名が、また明治15年度には第一国立銀行頭取の渋沢栄一が講師を嘱

託されて「本邦理財の実況を講説」したという(『東京大学経済学部五十年史』、5頁)。

その後、さきにもふれたように、明治19年の「帝国大学令」によって東京大学は「帝国大学」へと改組され、かつ分科大学制度が採用された。それにともなって、経済学関連科目は新たに法科大学へと移されることとなった。つまり、経済学関連科目は「経済学部の独立が実現されるまで33年の間〈法科大学〉の体制のもとで行われ」(同前、6頁)ることとなったわけである。その間、同政治学科に置かれた経済学関連科目について調べてみると、法科大学政治学科の発足当初には「理財学」「統計学」「財政学」などであった。明治21年になると、「理財学演習」「貨幣論及銀行論」が加わり、23年以降には「理財史」なども講義科目として登場しはじめた。

以上のようにして、東京大学(のち帝国大学)においても同様に、経済学関連科目としては「理財学」や「理財史」などの名称が用いられてきたことがわかる。たしかに「経済学」よりも「理財学」の方が優勢を占めていたことが確認できるわけである。

ところで、その後、東京大学において最終的にそれらの科目名が「経済学」や「経済史」などと改称されたのは明治26(1893)年9月、講座制が施行され、学年制から科目制への変更などにともなっての措置であったという(『東京大学百年史』(1)、884頁)。「このさい行われた学科課程の改正によって、政治学科に配された経済学関係科目は〈経済学〉〈経済史〉〈財政学〉〈統計学〉で……〈理財学〉という名称が完全に姿を消すこととなった」(『東京大学経済学部五十年史』、7頁)。すなわち、東京大学においては、「理財学」が優勢を占めていたのは明治12年から26年までの間のことであった。

ちなみに、私学においても専修大学がそれまでの「理財科」を「経済科」へと名称復帰させたのは遅れて明治38(1905)年のことであった。また、「〈理財〉という翻訳後を一番長く維持していた慶応義塾は、私立大学として認可された1919〔大正8〕年に〈理財科〉を〈経済学科〉へと改称した」(李憲昶、193頁)。これらのことが示しているように、私学における「理財」の語についていえば、それは、必ずしも「明治後期になって〈経済〉に落ちついた」というわけではなかった。そこでは「理財」は明治後期や大正期にいたるまで使われていたのである。

5　「理財」とはそもそも何か

以上が、明治前半期の大学などにおける「理財学」の変遷である。それでは、この「理財」という用語そのものは本来、いったいどこから来たのだろうか。『日本国語大辞典』によれば、「理財」とは「金銭財物を有利な結果を得るように取り扱うこと。経済」、とある。また、『大言海』でみると、「(一)金銭ノ用ヰヲ取締ルコト。有利ナル結果ヲ得ルヤウ、財貨ヲ整理スルコト。経済」とあって、続けて次の文章が引かれている。

何以聚人、曰財、理財正辞、禁民為非、曰義。(『易経』繫辞、下伝)

「何によってその人を聚めることが可能かといえば、それは財物である。そこでその財物を正しく

管理し理非曲直の判断を正しくし、民衆が非行におもむくのを禁ずることを義と名づけるのである」。（高田真治・後藤基巳訳『易経』岩波文庫、下、253～４頁）。

つまり、「理財」の語の淵源をたどってみれば、これも本来は古典漢籍からの借用語であったことがわかる。しかしながら、この「理財」という漢籍語は近代にいたるまで長く日本では通用することがなかったらしい。というのは、「漢籍・仏典に典拠の見られるもので、わが国の文献に用例が見いだされず、古辞書類にも見えない漢語は多数に上る」が、「理財」はそのうちの一つであるとされているからである（佐藤喜代治『国語語彙の歴史的研究』、341頁）。つまり、「理財」の語は、明治期になってようやく長い眠りから目覚めたことになる。そして、この古い漢籍の言葉に新たに「経済 economy」の意味を初めて吹き込んで用いたのは、『日本国語大辞典』によれば津田真一郎であることが示唆されている。同訳『泰西国法論』（1868）のなかの「政令理財は万機一途に出て命令能く行はるるを以て緊要とす」、が引かれているからである。あるいは、福沢諭吉『西洋事情』（1866～70）にも「蘇格蘭の人ロウなる者智慧ありて理財に巧なり」、と使われたことなどが採録されている。

ちなみに、この「理財」という言葉は明治期における大学などの高等教育機関だけで占有された言葉ではなかった。政府の勅令などにも、たとえば「文部大臣ノ認可ヲ経タル学則ニ依リ法律学政治学又ハ理財学ヲ教授スル……」（「文官試験試補及見習規則」明治20年７月25日勅令第37号）、などのように現れている（教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第三巻、229頁）。あるいは、当時の文学作品の中にも「理財」を見出すことができる。「収入も相当にはあったけれども、理財の道に全く暗い」（有島武郎『或る女』）、などなど。かつては「理財家」というような表現も使われていた。「理財」の語は、当時の世間である程度の広がりをもって使われた言葉であったことになる。

また、周知のように、現在においても財務省（旧大蔵省）の内部には「理財局」という名の部署がおかれている。その淵源をたどってみれば、同省において理財局が初めて現れたのは明治30（1897）年４月のことであった。当初はその下に国庫課と国債課があり、翌年に銀行課が加わった。「31年以降、理財局は金融行政を一元的に統括する部局として確立した」（『大蔵省百年史』（上）、244頁）、という。爾来、その管掌分野に変動こそあったものの、「理財局」は戦前戦後を通じて今日にいたるまで同省における主要内局の一つとしての地位を占めてきた。

あるいは、今日、一部の商工会議所の組織名のなかに「理財」の言葉がわずかに生き残っているのを発見できる。一例として東京商工会議所の場合をみると、東京商法会議所（明治11）、東京商工会（明治16）などといった改編の歴史を経たのちに、明治24年に東京商業会議所と名称変更された。そして、その東京商業会議所の定款（第44条）には、「本会議所ハ会員ヲ左ノ部門ニ分チ常ニ商勢ヲ視察シ調査ノ要務ヲ担任ス」とあり、「一商業部、二工業部、三理財部、四運輸部」と書かれていた（『東京商工会議所八十五年史』、554頁）。昭和３年になると東京商業

会議所はさらに東京商工会議所と改称されたが、その新定款にも「本会議所ニ左ノ五部ヲ置キ関係事項ヲ調査審議ス」(第７章第58条)、とされ、「一商業部、二工業部、三貿易部、四交通部、五理財部」として「理財」の語は生き残った（955頁)。その後、戦時中や戦後の混乱を経た後、昭和29年に改正された新定款においては、「理財部」は「金融部会」と変更されて最終的にその名を途絶えている(『東京商工会議所百年史』、484頁)。しかしながら、いくつかの地方の商工会議所のなかには、今日でも「理財部」の名称は生き残ったまま使われている。

6　「経営」の語について

ここで閑話休題。これまで大学などにおける「経済」などをみてきた関係で、他方の「経営」についても少しだけふれておこう。いうまでもなく、「経営」は「経済」と並んで大学におけるもっともポピュラーな科目（学部）名の一つである。

これまで見てきたように、「経済」の方は「経世済民」の短縮語であった。それに対して「経営」という語は、すでに中国最古の詩集である『詩経』（小雅・北山詩）のなかにそのままの形で現れる。たとえば――

旅力方剛　経営四方（旅(おお)くの力の方(まさ)に剛(つよ)ければ、四方を経営せしむ）

あるいは、司馬遷の『史記』（項羽本紀）に

欲以力征経営天下　五年卒亡其国身死東城（力征を以て天下を経営せんと欲せしも、五年にして卒(つひ)に其の国を亡ぼし身東城に死す）

などがある。

いくつかの辞書を繰って「経営」という字句について調べると、「経ハ縄張ナリ、営ハ其向背ヲ正スナリ」(『大言海』)とある。すなわち、「経営」とは、もともとは「（１）なわを張り土台をすえて建物をつくること。縄張りして普請すること。また造庭などの工事をすること」であった。そこから転じて、しだいに「（２）物事のおおもとを定めて事業を行うこと」へ、あるいは、「（３）物事の準備やその実現のために大いにつとめはげむこと。特に接待のために奔走すること」、などへと変化したという（以上、『日本国語大辞典』)。

「経済」や「経営」に使われる「経」そのものの意味は、本来は「経緯（縦糸と横糸)」のように「たていと」を示し、そこから多数の意味が派生した。たとえば、諸橋轍次『大漢和辞典』をみると、「經」の字には、たていと、たて、みち、つね、のり、ことわり、義、をさめる、いとなむ、すくふ、……など35もの意味が並べられている。藤堂明保『漢和大字典』をみると、たていと、たて、おさめる、へる、などにまとめられている。「経世済民」の「経世」とは、前に見たように、世の秩序を正しくおさめることを意味していた。

ちなみに、この「経」の字を用いた関連語に「経紀」というのがある。「〈経紀〉は漢籍で本来、綱紀・すじみちの意で、人や国を治める意にも用いられ、唐代には家を治める・家計をと

りしきる意に転じ……更に宋代以降、商売・売買・商人の意に用いられ」たという。日本でも、「経紀」の語は江戸期において商人、あるいは商売の経済行為を示す言葉として使われたらしい（以上、佐藤亨「〈景気〉とその周辺の語」、23頁）。

さて、この「経営」という語は、日本においてもずいぶん古くから、平安時代から使われた言葉であったという。また、平安時代には「経営」は「けいめい」という音であったらしい。『源氏物語』や当時の公家の日記などにも「けいめい（経営）」が出てくる。たとえば、「大殿もいみじくけいめいし給ひて、日々にわたり給ひつつ……」（夕顔巻）や、「中納言殿おはしますとて、けいめいし合へり」（総角巻）、などであって、いずれも「支度準備に奔走する」という意味で用いられている。「〈経営〉をなぜ〈けいめい〉と読むのか、その理由は明らかではない。〈経〉は隋唐の時代は［kiaŋ］という音で鼻音で終る……この鼻音の影響でエイがメイに転じたかとも思うが、それには［ŋ＞m］という音の転化が前提となり、それには確かな根拠が見いだされない」（佐藤喜代治『日本の漢語』、173頁）という。

また、もともとは白詩にもあるように、「此心知止足、何物要経営」（心に分相応の満足を知っている、何をあくせくすることがあろうか）の字句のように「経営は心の働きについて言う」（松尾良樹「平安朝漢文学と唐代口語」『国文学　解釈と鑑賞』55－10、31頁）場合もあったという。

以上はともかくとして、このように「経営」という言葉の意味内容は時代とともに「物事の実現に向けて励む」、あるいは「努力してやりくりする」意味へと変化を遂げてきた。「経営」は、ときには「計営」とも表記された。たとえば、「幾多の社会改良家が計営惨憺して打撃を加へたるよりも尚ほ巧妙に改革せられたる社会的改革」（横山源之助『日本の下層社会』、1899）、のように。

こうして、「経営」の語はしだいに「努力してやりくりする（manage）」意味の用語となった。一例として、15年もの長い歳月を費やしてようやく完成刊行された『大日本国語辞典』（冨山房、1915～18年、『日本国語大辞典』の前身）への「序文」（三上参次）のなかには、「拮据経営十五年の久しきに亘りて……」、などという表現が出てくる。あるいは、「身に政治の伎倆なく又思想もなき者が、辛苦経営して選挙を争ひ」（福沢諭吉『福翁百話』、1897）、などの用例もそのことを示している。

その場合、ここで興味深いのは、「経営」のかつての用法は今日的なそれとは少しく異なったものであったという点である。

つまり、当初には、「経営」はたとえば「大陸経営」や「戦後経営」などのように使われることが多かった。すなわち、周知のこれらの歴史的な熟語が示すように、「経営」は主として「政治・公的な儀式、また非営利的な組織体についてその運営を計画し実行すること」に用いられてきた言葉であったという。「天下を経営する」などもその種の表現であろう。つまり、「経営」という言葉は私的な事象よりも、もともとは「大陸経営」「戦後経営」などのように、むし

ろ公的あるいは非営利的な目的に向ける努力の方に用いられることが多かった。それが、今日では一転して、もっぱら「会社、商店、機関など、主として営利的・経済的目的のために設置された組織体を管理運営すること」が中心的な用法へと変化していったという（以上、『日本国語大辞典』、1208頁）。

7 「理財」か「経済」か

さて、以上見てきたように、明治のある時期には東京大学（帝国大学）などの高等教育機関ではたしかに「経済学」でなく「理財学」という用語が優勢を示したことがわかる。天野為之が明治32（1889）年に創刊した雑誌のタイトルは『日本理財雑誌』と名付けられた。

しかしながら、ここで指摘しておかねばならないのは、当時の一般社会においては「経済」という用語もまた広く使われていた、ということである。すなわち、「明治後期になって〈経済〉に落ちつく」よりも以前から、幕末・明治初期の一般社会では political economy や economics に相当する日本語として「経済」という用語が並んで広く使われていた。いや、むしろ「経済」の語の方がより普通一般に用いられる言葉であったという事実なのである。

換言すれば、明治期において最初は「理財」が優勢でのちに「経済」に落ちついた、というわけではなかった。さきにも出てきたように、東京大学でも最初に用いられたのは「経済学」であった。それが「理財学」に変更されたのは明治12年のことであり、「従来経済学と称したものが此時理財学と改められた」（教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第二巻、321頁）。

あるいは、さきにもふれたように、専修学校でも明治21年にもとの「経済科」を「理財科」へと名称変更した。しかも、そこで行われた「理財科講義」の実際の科目名を調べてみると、経済汎論や経済史論などのように「経済」の語も同時並行して使われていたことがわかる。また、「専修学校理財学会」が設立されたのは明治23年であったが、その機関誌のタイトルをみると「専修学校理財学会経済論叢」というものであった（森下澄男「専修学校の〈理財科講義〉および〈専修学校理財学会〉」）。「経済」と「理財」の双方が混用して使われていたのである。

事情は慶応義塾でも同様であった。明治23年に大学部が設置されて理財科が新たにスタートしたが、理財科における実際の科目名を見てみると、経済学元理、近世経済史、経済学諸派概論など、「経済」の語が使われていた（『慶応義塾百年史』中巻（後））。つまり、学科名と科目名との間にズレが生じていた。

「理財」よりも「経済」の語の方がむしろ普通一般に使われた用語であったことは、何よりも当時に刊行された雑誌や書物のタイトルなどからも明らかである。たとえば、田口卯吉が経済雑誌社を創業し『東京経済雑誌』を刊行しはじめたのはすでに明治12（1879）年であった。この「経済雑誌社は、福沢諭吉の慶応義塾とならんで、自由主義経済思想のわが国への導入と普及にあずかって力があった」（杉原四郎「古典派経済学と〈東京経済雑誌〉」、223頁）。明治10年代

は自由民権運動とともに自由主義的経済学が全国的な広がりをみせた時期でもあった。田口はその前年にも『自由交易日本経済論』という書名の本を上梓している。

あるいは、明治20（1887）年には『国民之友』や『国家学会雑誌』（ともに月刊）が創刊されたが、前者の表紙には「政治社会経済及文学之評論」と角書きされていたという（進藤咲子「雑誌《国民之友》の漢字」、89頁）。後者についても、その刊行の目的は「憲法行政財政外交経済政理統計等国家学ニ属スル諸学科ヲ講究スル」ものとされていた。両者は「ともに純然たる経済雑誌ではないが、すくなくとも創刊の当初は両誌とも経済や経済学の問題がとくに重視されていた」（杉原四郎『日本の経済思想史』、67頁）のであり、「経済」の語は普通一般に用いられていたことがわかる。町田忠治や天野為之らによって雑誌『東洋経済新報』が出はじめたのは明治28（1895）年であった。

また、「経済」の語は外国経済書の翻訳書のタイトルにも広く使われていた。「幕末には〈経済〉が脱〈経世済民〉化する傾向がはっきり見えていて、その傾向をもうひとつ飛躍させたのが英書の翻訳でした」（馬場宏二、前掲、7頁）。のちに吉野作造によって「西洋経済書の我国に於ける最初の紹介と観てよからう」（吉野作造「経済小学解題」、1929）、と評された神田孝平による邦訳書のタイトルは、まさしく『経済小学』（翌年に『西洋経済小学』と改題）というものであった。同書は、1867（慶応3）年に英人 William Ellis の著書“Outlines of Social Economy”（1846）をオランダ語から重訳したものであり、福沢諭吉『西洋事情』外編の「題言」のなかにも取り上げられている。もちろん、その後においても陸続と、外国経済書の邦訳書の書名に「経済」を冠するものが相ついだのである。また、とりわけ「福沢の《西洋事情》及びその外編、二編は幕末から明治初期にかけて広く読まれたため、訳語の〈経済〉と〈経済学〉も速やかに世に広まっ」（馮天瑜、172頁）ていった。

8　なぜ大学では一時期「理財」だったのか

以上述べたように、西洋近代の経済学をあらわすのに「経済」という用語は幕末・明治初期からすでに広く一般にも流通していたことがわかる。必ずしも明治期の後半になって初めて、「〈理財〉から〈経済〉に落ちつ」いたわけではなかった。「経済」と「理財」は同時並行的に使われていた。

しかし、大学などの高等教育機関では一時期とはいえ「理財」の方が優勢を占めていたのも事実であった。そこで、むしろ問題となってくるのは、なぜ大学などでは当初（とくに明治10年代～20年代）には「理財」の方が優勢を占めることとなったのか、であろう。あるいは逆に、それはなぜ明治期の後半以降にふたたび「〈経済〉に落ちつく」こととなったのか、である。

端的にいってしまえば、新しく流れ込んできた西欧の経済学、つまり「経済の定則」を示すのに、古い「経世済民」あるいは政治道徳の匂いを残す「経済」という用語では不満だったの

であろう。とりわけ、それらの啓蒙的な紹介者たちにとって、経世済民的な色彩の残る「経済」という言葉を回避しようとする気持ちがより強かったのではないか。

たとえば、西周はその『百学連環』のなかで、「〔経済学は〕経世済民より採り用へたる語にして、専ら活計のことを論するには適当せさるに似たり。故に余は孟子の制民之産の語より採りて制産学と訳せり」(『西周全集』、第四巻、235頁)と述べていた。実際、彼は1870年代まで「訳語として〈経済学〉〈制産学〉と〈利学〉などの言葉の間で躊躇していた……西周にとって〈経済学〉は Political Economy の理想的な翻訳語ではな」(馮天瑜、175頁)かった。あるいは、「日本の近代啓蒙思想家、福沢諭吉や西周などは、〈経済学〉を使ったにもかかわらず、満足はできなかった。福沢諭吉は〈理財学〉、西周は〈制産学〉が気に入っていた」(同前、181頁)、など。

いずれにしても、新しい概念には新しい用語が必要であった。そのための新用語として登場したのが「理財」であったものと思われる。この「理財」の語は、「〈自由〉〈平等〉〈人権〉などと共に、新時代を象徴する語として容易に人々に受容され、定着していった」(佐藤亨『幕末・明治初期語彙の研究』、381頁)。

あるいは、何よりも「理財」の語の方が実践的な「経済の定則」を示すのにより適合的な用語として好まれたのであろう。たとえば、明治政府は Arthur Perry の著書“Elements of Political Economy”(1866)の部分訳を当初は『経済原論』として刊行したが、明治８年からその完訳版を『理財原論』と改称して出版した。この「《理財原論》の下に〈一名経済学〉が付いてあり、本文には〈経済学〉という翻訳語が使われた。……《理財原論》では〈経済学〉を交易と価格決定の理論を探求する学問と定義したが、このような定義は〈経済〉より〈理財〉という漢語に相応しい」(李憲昶、191頁)。もちろん、「理財」の語は「新古典派の概念に相応する厳密でかつ分析的な意味を表していない」ものの、「資源の効率的な配分という意味に近い漢語は、財貨の効率的な管理を意味する〈理財〉であ」(李憲昶、177頁)った、という。

「ですから、関係はありますが、〔経世済民では〕ぴたっと合うわけではありません。むしろ〈食貨〉という言葉の方が、いまの経済の方に近いでしょうね」(杉原四郎『日本の経済思想史』、145頁)、という指摘もある。ちなみに、「食貨」とは「食物と財貨。転じて経済のこと」(『日本国語大辞典』、382頁)、とされている。「物質的欲求の充足という意味を〈経済〉より的確に表現する漢語として〈食貨〉〈生計〉〈利用厚生〉などがある」(李憲昶、177頁)という指摘も見出すことができる。さきの太宰春台『経済録』のなかでは、篇名だけをあげれば、総論、礼楽、官職、天文地理律暦、祭祀学校などと並んで「食貨」篇が出てきた。

以上はともかく、おそらく当時の啓蒙的な紹介者たちは、当初は「経世済民」の匂いが残る「経済」という用語を敬遠しようとした。とくに大学などの教育機関では、「経済の定則」を講ずるに際して、より新鮮な響きをもつ言葉として「理財」を見つけ出し、それに新しい意味を吹き込んだ上で「理財」の方を好んで用いたのであろう。「〈経済〉という語は経国済民から

出ておって、太宰春台の〈経済録〉などが適当の用法であることは勿論であるから、明治14年の東京大学の規則には〈理財学〉と改められた」（穂積陳重『法窓夜話』、194～５頁）、という指摘もある。

いずれにせよ、「経済」には「経世済民」の古い匂いが染みついていた。にもかかわらず、他方では「経済」という用語は一般社会で根強い力を残したままに使われていた。そして、その古い「経済」の語も、当然のことながら時代の変遷のなかで中身を変えていく。すなわち、やがては時の経過とともに、「一旦外来の英語の概念に照らして訳語として成立し、固定した意味概念が込められ」（陳力衛）るように変化しはじめた。「経済」という用語のなかにあった「経世済民」の意識が薄まるにつれて、「経済」の語はかつての漢籍語の短縮形から新たに西洋語 economy の翻訳語へと転換しはじめたのである。そこで初めて、大学などの高等教育機関でもふたたび「経済」への回帰現象が生じたのではないだろうか。

東京大学（帝国大学）の場合については、次のような指摘も見出される。「世間では経済学という語は神田氏以来久しく行われて、既に慣用語となっているし、原語の〈ポリチカル・エコノミー〉とても、本来充分にその意義を表している訳ではないから、やはり〈経済学〉という名称に復するのが好いという論が、金井〔延〕・和田垣〔謙三〕両教授などから出て、そこで明治26年９月の帝国大学法科大学の学科改正の時から、再び経済学という名称に復したのである」（穂積陳重『法窓夜話』、195頁）。

ちなみに、「〈経済学〉という翻訳語が最終的に勝利を得た原因」について、それを当時の輸入経済学の潮流の変化のなかに求める見解もある。つまり、「ドイツの歴史学派経済学がイギリスの自由主義経済学に対抗しながら登場し、1880年代に日本の経済学の主流になった事実」（李憲昶、194頁）を重視せんとする見解である。明治中期以降には、ドイツの国家主義的な傾向を反映した歴史学派経済学がしだいに台頭しはじめ、国民経済形成による国家統合や近代産業国家の樹立に好ましい思潮として広まった。このような時代背景の変化もあって、「国家学或いは国家経済学に親和的な〈経済学〉という語が、自由主義思想に親和的な〈理財学〉という語に対して勝利した」、というわけである。したがって、「国家学の中心地である東京大学で、まず1893年に〈理財学〉という翻訳語を〈経済学〉に代替したことは当然の帰結であった……それに反して、民間商工人の養成を基本目標とし自由主義経済学の伝統が強かった慶応義塾が〈理財学〉という翻訳語を一番長く固守した理由も理解できる」（李憲昶、194～５頁）。

ただ、少しばかり注意しておくべきなのは、前述したように、専修学校や慶応義塾などの私学では、学科名（「理財科」）と科目名（「経済学」）の間にズレが生じていたことである。表看板は「理財」であったが、教室での実際の科目名には「経済」が使われるようになっていた。これには、「理財」の語が明治前期に一部の官庁用語（政府の勅令など）として広がりをみせたことを背景として、民間の教育機関が制度的にそれに従って学科名としては使用せざるをえなか

ったという事情とも無関係ではないであろう。

以上、縷々述べてきたような紆余曲折をたどりながら、西欧近代の economy を表現する日本語として「経済」という用語がはっきりと定着することとなったわけである。いうまでもなく19世紀の後半には、日本におけると同様に中国や朝鮮でも西欧近代の学問が流れ込んできた。そこでもまた、さまざまな political　economy の訳語が模索され続けてきた。たとえば、「経済学」や「理財学」などの用語のほかにも、中国での「富国学」「資生学」「生計学」「計学」や、朝鮮での「国財論」、などなど。それぞれの状況については、詳しくは馮天瑜や李憲昶らのすぐれた研究がある。political　economy の訳語をめぐる各種さまざまなこれらの模索のなかで、最終的に「和製漢語」の一つとして定着した「経済学」という翻訳語が近隣の漢字圏の諸国へと輸出されたわけである。

【参考文献】

一海知義『漢語の知識』岩波書店、1981
井上琢智『黎明期日本の経済思想』日本評論社、2006
井上哲次郎・有賀長雄『哲学字彙』、1881
大蔵省百年史編集室『大蔵省百年史』（上巻）（別巻）、1969
川口浩編『日本の経済思想世界』日本評論社、2004
教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第二巻、第三巻、1938
慶応義塾大学『慶応義塾百年史』中巻（後）、1964
佐藤喜代治『国語語彙の歴史的研究』明治書院、1971
佐藤喜代治『日本の漢語』角川書店、1979
佐藤亨「〈景気〉とその周辺の語」『国語学研究』14、1975
佐藤亨『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社、1986
眞田治子『近代日本語における学術用語の成立と定着』絢文社、2002
島崎隆夫「日本経済思想の研究史」『日本における経済学の百年』（上）日本評論社、1959
進藤咲子『明治時代語の研究』明治書院、1981
進藤咲子「雑誌《国民之友》の漢字」『近代日本語と漢字』明治書院、1988
杉原四郎「古典派経済学と〈東京経済雑誌〉」長幸男編『近代日本経済思想史』有斐閣、1969
杉原四朗『日本の経済思想史』関西大学出版部、2001
杉本つとむ『語源海』東京書籍、2005
杉山忠平『明治啓蒙期の経済思想』法政大学出版局、1986
陳力衛『和製漢語の形成と展開』汲古書院、2001
東京商工会議所『東京商工会議所八十五年史』、1966
東京商工会議所『東京商工会議所百年史』、1979
東京大学経済学部編『東京大学経済学部五十年史』、1976
東京大学『東京大学百年史』部局史（１）、1986
『西周全集』宗高書房、第四巻、1981
馬場宏二「経済という言葉―意味・語源・歴史―」大東文化大学「Research Papers」44、2004

馬場宏二『会社という言葉』大東文化大学、2001
馮天瑜「中国語、日本語、西洋語間の相互伝播と翻訳のプロセスにおける〈経済〉という概念の変遷」『日本研究』31、2005
『福沢諭吉全集』岩波書店、第一巻、1958
穂積陳重『法窓夜話』岩波文庫、1980
堀経夫『明治経済思想史』（増訂版）日本経済評論社、1991
本庄栄治郎『日本経済思想史研究』日本評論社、1942
松尾良樹「平安朝漢文学と唐代口語」『国文学 解釈と鑑賞』55－10、1990
明治大学『明治大学六十年史』、1940
明治大学法学部『明治法律学校における法学と法学教育』、1966
森下澄男「専修学校の〈理財科講義〉および〈専修学校理財学会〉」『専修商学論集』23、1977
八木紀一郎『近代日本の社会経済学』筑摩書房、1999
八木紀一郎「福沢諭吉」大森郁夫編『日本の経済思想』日本経済評論社、2006
吉野作造「経済小学解題」『明治文化全集』経済篇、1929
李漢燮編『近代漢語研究文献目録』東京堂出版、2010
李憲昶「漢字文化圏における Political　Economy と Economics の翻訳」『漢字文化圏諸言語の近代語の形成』関西大学出版部、2008